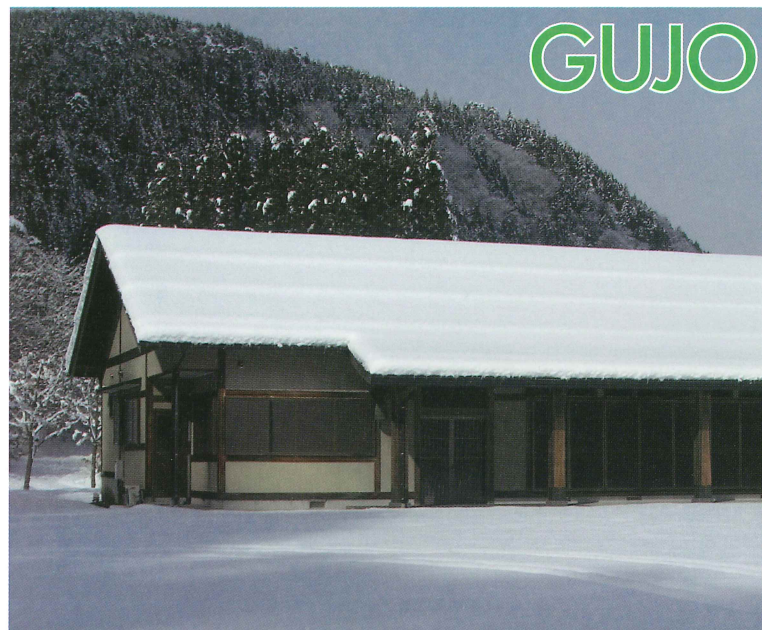


出遇いをもとめて

岐阜教区 3別院 1教会





真宗大谷派には、日本全国に52ヶ寺、海外開教区に3ヶ寺の別院がある。別院は江戸時代の「御坊」にはじまり、地域門徒の結集の場として重要な位置にあるとともに、教団構造の中においては、地方に位置する地方本山（中本山）として、本山と一般寺院・門徒を繋ぐ重要な役割をはたしてきた。1876（明治9）年に『宗規綱領』が制定されて、御坊レベルの地方有力寺院の扱いを新たに定める必要性が生じ、ここに「別院」と称する寺院が規定されることになった。

別院はその地域の教化の中心道場として堂宇を備え、本尊を安置し、教義を宣布し、儀式を執行し、同朋社会を実現することを目的としている。

真宗大谷派の寺院は全国に約8800ヶ寺ある。それらの寺院を地域ごとに区分して教区と名づけている。

岐阜教区の寺院は、岐阜市・本巣郡（北方）・各務原市・関市・美濃市・羽島郡・羽島市・安八郡・大垣市（墨俣）・瑞穂市・恵那市・多治見市・土岐市・中津川市・郡上市・可児市・美濃加茂市・可児郡・加茂郡に在している。そのような岐阜教区には、「岐阜別院」・「竹鼻別院」・「笠松別院」の三つの別院と、郡上地域の聞法・研修道場として僧俗一体の説教所としての役割を担っている「郡上教会」があり、ともに聞法、教化の場として地域に根づいている。



年間行事

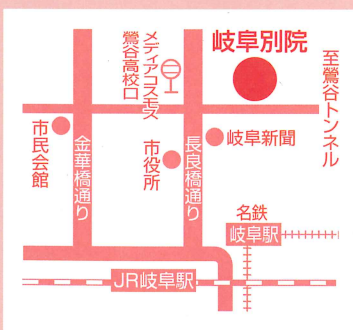
- 1月1日 ●修正会法要
 3月 ●春季彼岸会法要(4日間)
 4月27～28日 ●春の報徳会法要
 7月14～15日 ●盂蘭盆会法要
 8月1日～2日 ●暁天講座
 8月1日～2日 ●夏の御文法要
 8月中旬 ●全納骨者お盆法要
 9月 ●秋季彼岸会法要(4日間)
 11月28日
 ●宗祖親鸞聖人御祥月法要
 12月8日～11日 ●報恩講
 12月31日 除夜の鐘
 毎月20日
 ●仏教公開講座
 「生きるってどういうこと」
 毎月13日 ●前住上人御命日
 毎月21日・22日 ●永代経法会
 (22日 納骨式)
 毎月28日 ●親鸞聖人御命日法要

●のあるところでは、法要の後、お話(聞法)があります。どなたでも自由に来院、聴聞いただけます。

アクセス

岐阜別院

〒500-8054
 岐阜県岐阜市大門町1番地
 Tel.058-262-1380
 Fax.058-265-0160
 (鉄道・バス)
 JR「岐阜駅」下車、市バス「岐阜市役所」下車徒歩5分
 名鉄「名鉄岐阜駅」下車、岐阜バス「メディアコスモス・鶯谷高校口」下車徒歩5分



その答礼として、書院とお茶席が1923(大正12)年頃、別院に移築された。この書院とお茶席「水月亭」は、茶道裏千家十一代家元・玄々斎の指導で1873(明治6)年頃、東本願寺に建立されたものであった。しかし2000(平成12)年、老朽化した御殿を壊してその跡地に保育園の新園舎を建てる計画が立ち上がった。御殿の取り壊しや、それに伴う境内の大樹の伐採に反対する声もあがっていたが、新園舎建築のため工事は進められた。その際、お茶席「水月亭」は裏千家岐阜支部が譲り受けて、2003(平成15)年、伊奈波神社に移築され、現在でも「水月亭」としてお茶会等が催されている。

境内には、幹の周囲2m、高さ16mの立派なクロマツがあり、昭和47年に、岐阜市指定保存樹(指定番号No.41)に登録されたが、松くい虫の被害に

あい、枯れてしまった。また1925(大正14)年10月に、二十三代彰如(句仏)上人を迎えて厳修した宗祖親鸞聖人六百五十回御遠忌の時の句仏上人の句碑「山を出でし真如の月を拝しけり」も境内の本堂前にある。1987(昭和62)年から1990(平成2)年にかけて、本堂屋根瓦の葺き替え工事、堂内や境内の改修が行われ、その後、教務所が内在する岐阜教区同朋会館も老朽化のため敷地を別院境内西側から東側奥に移動し、教区のさらなる教化を願い、2010(平成22)年に竣工され現在に至っている。

岐阜別院は岐阜教務所が隣接していること、土地が岐阜市内という好条件にあることもあって、教区として行方聞法、教化活動の会所となる事も多く、中心的な存在となっている。

岐阜別院



16世紀後半、美濃国各務郡加納村(現在の各務原市那加加納)に陣屋を構えていた旗本・坪内惣兵衛が教如上人に帰依し、本願寺第十二代教如上人の掛所として1601(慶長6)年に、陣屋近くに堂宇を創建した。その後、厚見郡小熊村(現在の岐阜市小熊町近辺)の門信徒が本山に願い出て、第十三代宣如上人が1624(寛永元年、寺地を厚見郡小熊村に移転し、掛所(東本願寺出張所)として現在の地に再建された。再建される前からこの周辺には、願正坊・円龍寺・慈恩寺・浄土寺・上宮寺・唯敬寺の六ヶ寺が建っていた。掛所が造立されたとき、慈恩寺大門と替地をし、寺地が小熊であったため、「小熊御坊」と言われたが明治になって「岐阜別院」と改称され、「東の御坊様」とよばれ多くの人に親しまれてきた。

当時の本堂の規模は、間口12間、奥行11間の大伽藍であった。その後1658(万治元年)に梵鐘が鋳造、1752(宝暦2)年に山門が建造された。1891(明治24)年、濃尾震災によって本堂その他諸殿が崩壊。仮本堂を建立し再建準備中、1912(大正元年)9月、台風によってまたもや崩壊。しかしその後1916(大正5)年、間口18間、奥行18間の木

造大伽藍をはじめ、鐘楼堂、諸殿等が完成し現在にいたっている。

本堂内の外陣東側には太子厨子があり、1770(明和7)年に作られた坐像、勝鬘經講讀太子像(聖徳太子像)が安置されている。これは、1895(明治28)年4月、奈良の法隆寺より授与され、当時本堂に安置されたが、別院裏山の半腹に飯太子堂が建設されるとそちらへ遷座、しかし暴風のため太子堂は倒壊。そのためしばらくの間、隣地の寺に奉安され、1928(昭和3)年12月12日、別院の境内、本堂の東側に建立された太子堂に遷座された。

1930(昭和5)年9月、岐阜別院聖徳幼稚園(現在の聖徳保育園)が、本堂東側(太子堂横)に創立された。それゆえ太子堂は職員や園児にとつても身近な存在となっていた。

また園児は園舎に入内する際本堂の前を通っていたため、朝は「のさま おはようございます」、帰りは「のさま さようなら」と、必ず本堂に向かって挨拶をする元気な声が聞こえていた。

一方別院境内、本堂西側には立派な御殿が建っていて、円山応挙が描いた襖絵があったが、濃尾震災で御殿が倒壊した際、襖絵は本山(東本願寺)に贈られた。すると本山より



年間行事

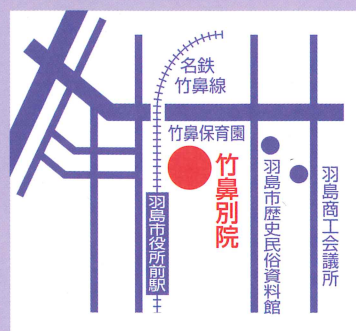
- 1月1日 ●修正会法要
 3月 ●春季彼岸会法要
 (彼岸中日の前後各3日間)
 4月下旬～5月上旬 ふじまつり
 7月17～20日 ●夏の御文
 8月 竹鼻子ども一夜研修会
 8月13日 ●墓前総供養
 9月 ●秋季彼岸会法要
 (彼岸中日の前後各3日間)
 12月15日～18日 ●報恩講
 12月31日 ●除夜の鐘
 4月～10月の間
 ●10回 竹鼻人生講座
 「生まれた意義と生きる喜びを見つけよう」
 毎月13日 ●前住上人御命日
 毎月28日 ●親鸞聖人御命日法要

●のあるところでは、法要の後、お話(聞法)があります。どなたでも自由に来院、聴聞いただけます。

アクセス

竹鼻別院
 〒501-6241
 岐阜県羽島市竹鼻町2802番地
 Tel.058-392-2379
 Fax.058-392-1999

〔鉄 道〕
 名鉄「羽島市役所前駅」下車徒歩5分
 〔自動車〕
 名神高速道路・岐阜羽島ICより車で県道46・151号線北へ約2km



竹鼻別院

1235(嘉禎元)年、親鸞聖人が関東より上洛される途中、三河国矢作の柳堂に立ち寄り布教された。その時、尾張国葉栗郡門間庄の住人、河野四郎道勝は、同郷の8人とともに帰依し、木瀬に草庵を結んで聖人を招いた。後世これを「河野九門徒」と呼び、濃尾真宗門徒のはじまりとされ、この草庵が竹鼻別院の起源といわれている。

1470(文明2)年、蓮如上人がこの地を巡回された際、洪水で流出していた木瀬の草庵を再興し、「河野御坊」と名づけられたとされる。その後「専福寺」と改称されたが、度重なる災害で何度も移転した。元龜・天正年間の、織田信長とのいわゆる「石山合戦」(1570)80年には、専福寺住職の忍語も出陣し、戦死した。

石山合戦後、専福寺は教如上人に従い、本願寺の東西分派(1602(慶長2)年に際しては、東本願寺に属し、1604(慶長9)年には教如上人によつて掛所(東本願寺出張所・御坊)に取り立てられ、近郷の54ヶ寺を配下に置くことになった。竹鼻の下町にあった「御坊専福寺」はその後二度の類焼に遭い、1760(宝暦10)年、現在の地に移転した。

本堂は1771(明和8)年に着工

上旬には優艶な紫色の花房を垂れ、藤棚を埋め尽くす姿はまさに絶景といえ、古くから「別院の藤」として、多くの人々に親しまれている。

1980(昭和55)年から開かれていた「人生講座」は門徒が中心となり早朝の開催でありながら多くの



し、39ヶ村の門信徒のご懇志と労力を結集して、50年の歳月をかけて14間余りの大伽藍が建立された。

「御坊大門」と親しまれた山門は1833(天保4)年に250両をかけて建立され、経堂は1848(弘化5)年に建立された。

その後1876(明治9)年「竹鼻別院」と改称されたが、これらの諸堂は1892(明治24)年の濃尾震災でことごとく倒壊した。しかし悲嘆する暇もなく、「法灯を護らねば」と篤信の門信徒によつて直ちに、南北8間・東西18間の仮本堂が建立された。現在の本堂は1915(大正4)年から1922(大正11)年にかけて再建され、山門は1925(大正14)年に建立された。この山門の柱は1本の大きな自然木でできている。下方に広がる柱はあまり見かけない形となっている。本堂・山門ともに棟梁は、明治期に京都・東本願寺(本山)を再建した伊藤平左衛門である。

また境内には樹齢300年以上といわれる藤が立っている。単独の1本の藤としては日本有数の大きさであり、岐阜県指定天然記念物になっている。枝張り東西約30m、南北約15m、それを支える幹の太さは約3mで、毎年4月下旬～5月

聞法者が集う。また広報誌を発行して別院での法要・聞法会を周知させ、別院の現状や地域の歴史等を発信していくことで、門徒をはじめ地域の人たちに親しまれ、聴聞の場としても開かれた別院が確立されていく事を願っている。



笠松別院

年間行事

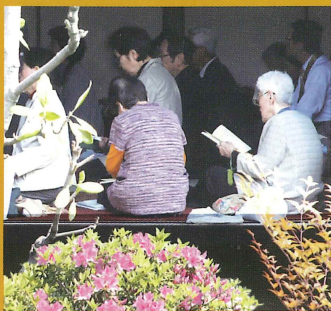
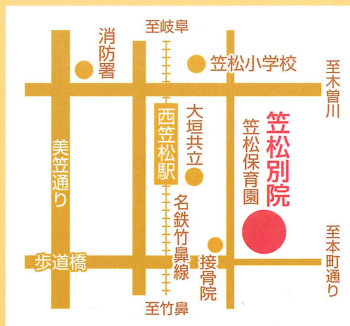
- 1月1日 修正会法要
 3月 ●春季彼岸会兼永代経法要
 9月 ●秋季彼岸会兼永代経法要
 12月 ●別院報恩講
 大谷婦人会報恩講
 年数回 ●笠松別院仏教公開講座

●のあるところでは、法要の後、お話（聞法）があります。どなたでも自由に来院、聴聞いただけます。

アクセス

笠松別院
 〒501-6075
 岐阜県羽島郡笠松町西宮町42番地
 Tel.058-387-2947
 Fax.058-387-0599

〔鉄 道〕
 JR「岐阜駅」下車、名鉄「名鉄岐阜駅」から竹鼻線で15分「西笠松」駅下車、徒歩5分
 東海道新幹線「岐阜羽島駅」下車、名鉄「新羽島駅」から竹鼻線で20分「西笠松」駅下車、徒歩5分



本堂跡基壇

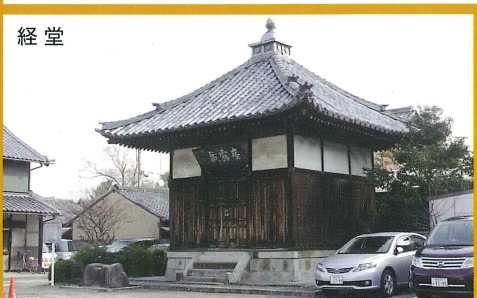
しかし、翌1974(昭和49)年4月3日、失火によって基壇のみを残して本堂は焼失した。現在は輪番所・山門・経堂・鐘楼に往時を偲ぶのみである。本堂再建の願いを持つものの、崇敬寺院と門徒数も少なく、近年の社会状況下において再建は困難を極めている。

庫裡の北側に御殿と呼ばれる座敷がある。これは1878(明治11)年に明治天皇の行幸があった際、柳原の木曾川沿岸に笠松輪番が発起して休憩所を建てたゆかりの建物で、別院境内地に移転されているものである。震災で倒壊したが、廃棄を惜しんで復元されており、別院で最古の建造物である。この御殿に本堂なきあと、仮本堂として御本尊を安置している。しかし御殿の本尊前の畳間は床・畳とも痛みがひどく、また須彌壇も宮殿もなく、ベニヤ板でつくられた台の上に本尊を安置して

いる状態であった。2014(平成26)年、岐阜教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要を厳修するにあたり、仮本堂の整備に苦慮している中、中越地震により解散した新潟の寺院より仏具寄贈の申し入れがあり、宮殿・須彌壇・宗祖厨子をはじめ仏具一式を受けいただき、床・畳等の修繕も行い、御遠忌を厳修することができた。この御遠忌を機縁とし、その後年間法要に加え仏教公開講座の開設等、地域に開かれた聞法の間となることを願いとして今にいたっている。

別院境内には、1948(昭和23)年に開園された笠松保育園が併設され、輪番が園長を兼任している。

経堂



笠松は木曾川右岸にあり、古来岐阜から加納を経て尾張国熱田(名古屋)に至る脇街道が通っていた。通称も御鯰街道といい、岐阜から名古屋への近道としての利用度が高く、木曾川流域の最大の港としても栄えた交通の要衝であった。

江戸幕府は1662(寛文2)年、ここに陣屋を置き、美濃の天領を治めた。寛政年間(1789~1801)年頃から近郷で綿業が盛んとなり、天保年間(1830~44)年には美濃織の生産と流通の拠点となった。

このように、笠松は陸海(河)交通の要地、経済の拠点、政治の中心地として栄えてきた。

そもそもこの地は、1586(天正14)年の木曾川の氾濫後に拓かれた村と伝える。それ以前は尾張国葉栗郡であったが、以後は美濃国に属した。開発には宝江村(旧・穂積町、現・瑞穂市)の者があたり、三ツ屋村(現・大垣市)などの真宗門徒が多く移住したという。

西本願寺では、十九代本如上人が文政年間(1818~30)年に江戸下向の際、休息する同派の寺院がなかったため、1837(天保8)年に門徒が坊舎を建て(西本願寺笠松別院の濫觴)、1846(弘化3)年に現在地(柳原町)に移転した。

これに対し、東本願寺では、元年間(1615~24)年に移転して来た上本町の法伝寺が、宗主の江戸下向と上洛の際に渡船を待つ休息所と定められていた。先のような西本願寺の動きを受け、当地の東本願寺門徒からも会所建設の動きが起り、1831(天保2)年に着工して1839(天保10)年4月に一字を建立した。これが東本願寺笠松別院の始まりで、二十代達如上人の時代である。当時の門信徒は80人あまりであったと伝える。その後、東本願寺掛所と呼称を改め、さらに1876(明治9)年から笠松別院と称している。

1891(明治24)年10月28日、濃尾大地震によって、大垣・竹鼻別院などと同様に諸堂倒壊という大被害を蒙った。その後1923(大正12)年に、門信徒は力を併せて諸堂を建立した。間口11間に奥行9間の本堂、5間に9間3尺の庫裡、山門・接見所・御殿・太鼓楼・経蔵などを950坪の境内地に再建し、旧にも増して教化・聞法を中心として門信徒の崇敬を集めた。

また、1973(昭和48)年10月には、本堂・山門などを修復し、宗祖親鸞聖人七百回御遠忌法要を厳修している。

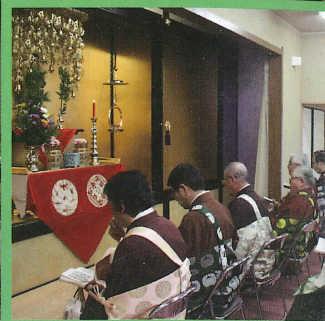
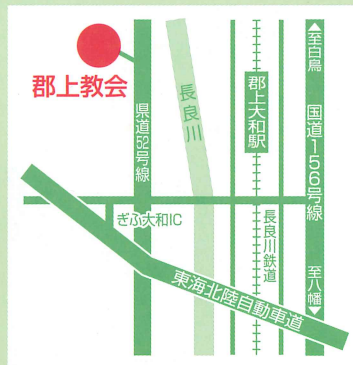
年間行事

- 1月 修正会法要
7月 ● 暁天講座
郡上連合組夏季講習会
郡上こども夏のつどい
8月 ● 暁天講座
● お盆法要
11月第4土曜日 ● 報恩講

● のあるところでは、法要の後、お話（聞法）があります。どなたでも自由に来院、聴聞いただけます。

アクセス

郡上教会
〒501-4613
岐阜県郡上市大和町名皿部
1015番地の3
Tel.0575-88-9058
〔鉄 道〕
長良川鉄道「郡上大和駅」下車
徒歩20分
〔自動車〕
東北自動車道・ぎふ大和ICより
車で県道52号線北へ約4km



郡上教会

1883(明治16年、郡上組(現在の13・14・15組)56ヶ寺の共同運営のもと、本山直属の説教所として郡上八幡町に開かれた。当時、郡上の寺院は飛騨高山の照蓮寺との関係が強い寺が多く、そのため郡上教区にもなれず、中本山というものもできず、しかし郡上が一つとなつていくには、それらをまとめる場所と機能が求められた。郡上教会が建てられた。

当初は住職の勉強・聞法の場として活用されていたが、門徒の人たちも誘って一緒に話を聴く、聞法を共にする場となつていった。暁天講座をはじめとする法座では、講師が泊まると、僧俗共に一緒に泊り込んで教えを聴く事が多かった。そのため二階は多くの人が泊まれるようになつており、門徒の方が数名世話人として常駐し、郡上教会の周りの人達からの協力を得ながら、維持管理に携わつていた。

場所も八幡町市街の中心に建てられていたため、地域の人たちにとっては便利もよく、さまざまな集会や地域の祭事に使用されたり、葬儀も行われたりする一方で、一般の人たちが着物の着付けに使う等、誰もが気軽に立ち寄れる場ともなつていた。さらに、遠方から通学・通勤

まえ、夏季にはキャンプ、冬季にはスキー研修等、ベッド数50床という大勢の人を収容できる宿泊研修施設「郡上青少年センター」を併設した郡上教会の建設計画が立てられていた。「郡上青少年センター」は二次計画として、まずは1998平成10年春、大和町の新しい敷地に郡上教会が竣工した。その年の秋には盛大に落慶法要が厳修され、寺族・門徒をはじめとする多くの参詣者がつどつた。その後、計画された「郡上

するための下宿としても使用され、高校生をはじめ年代の違う人たちが共同生活を送つていた。またある時には、「郡上踊り」の観光客などにも解放されていた。さまざまな人々がここで生活を営むにあたり、敷地内では野菜や花等を作ったり、漬物を作ったりもしていた。勿論、報恩講や永代経法要等の年間行事には多くの参詣者があり、僧俗一体となつて執り行つていた。

このように、地元の人たちにとっても郡上教会は拠りどころであり、大切な場所であり、寺院間でも中心的な場であつた。

しかし、時代の流れとともに自動車普及し、駐車場のない郡上教会は不便を感じるようになってきた。そこで自動車で行きやすく、広い駐車場を持った場所に移転する話もちあがり、また郡上教会の建物の老朽化にもなつて防災の管理上からの問題も指摘されたことにより、八幡町から北へ約10kmの郡上市大和町に移転が決まつた。

郡上3ヶ組(13・14・15組)では長年にわたり児童宿泊研修会が安養寺(八幡町)で行われていたため、大和町での郡上教会の建設構想の中では、そんな研修会の開催が出来る施設、さらに郡上の地理的環境をふ

青少年センター」は建てられることはなく、広い敷地を残したままとなつていく。現在、郡上教会は、郡上3ヶ組連合で維持管理され、連合組合同で報恩講、夏季講習、暁天講座をはじめ、坊守研修会、子どもの夏の宿泊研修、組会、組門徒研修会、僧侶の学事の研鑽の場等、各種研修会に活用されている。今後も研修道場の役割を果たしつつ、郡上の教化活動の拠点となつていくことが願われている。

出遇いをもとめて

岐阜教区 3別院 1教会

